2011.3.22 日本海新聞

オピニオン

「めだか論語シンポジウム
第1回論語の風・山陰大会」
実行委員会代表世話人

磯江　公博氏

この人に聞け

テーマ

「子どもに論語を学ばせよう」

論語が静かなブームという。鳥取県中部でも湯梨浜町のめだか論語塾や湯梨浜学園、三朝町立賀茂保育園が取り組んでおり、20日には松江市の6論語塾とともに「めだか論語シンポジウム第1回論語の風・山陰大会」を湯梨浜町引地の中国庭園「燕趙園」で開催した。なぜ今、論語か。同大会実行委員会代表世話人の磯江公博氏に大会の狙い、論語の魅力などを聞いた。

道徳と人間らしさ 普遍的な基準が必要

本当に幸せか

2年前、中国に行く機会があり、そのときに中国の人が言っていたのは「中国は経済が発展し、豊かになったが、大事なものを忘れてしまった」ということ。「それは何か」と聞くと、「心だ」と。そして「これからは子どもたちに論語を教えていきたい」と話していた。

考えてみれば、現在の日本も同じ。経済的には豊かだが、自殺者が年間に3万人以上とか、親が子を虐待したり、子が親を傷つけたり…。これって本当に幸せか、と考えたときに、われわれも論語に帰ろうということになった。それが全ての活動のベースになっている。

論語は孔子の教えを弟子たちが語り伝えたもの。約2500年前の話で、われわれには関係がないかというと、そんなことはない。当時の人も一生懸命に生きていて、その一生懸命に生きた人の生きざまや、そこから生まれた知恵、教訓が論語であり、現代人にも大いに参考になる。

日本人の基本

論語では仁とか義、和、忠、孝を大事にするが、これらはみんな日本人の基本だ。東日本大震災でも、物資がない中で被災者が食料を分け合うなど、共に助け合って生きていこうという文化がある。外国人がそれを見て、称賛する記事を書いているが、それが当たり前にできるのが日本人だ。

本来、日本人は一貫した道徳、人間らしさを持っている。それをもう一度、言葉にして親が子どもに教える。そういう流れを論語を学ぶことによってつくっていきたい。

論語は難しく、高齢者が対象になりがちだが、むしろ子どもたちにこそ学んでもらいたい。子どもたちに必要なのは、カチッとした基準。親孝行とか、友達を大事にしようとか、誰が聞いても、そうだと言えるような普遍的な基準を教える必要がある。

意味は分からなくてもいい。リズムでとにかく覚える。でも論語には全部意味があるので、20代、30代、40代、50代のときに生活の中で置き換えてみると、それぞれの理解の仕方ができ、大きな力になる。

小さくとも確かな風

日本人はこれまで、読み・書き・そろばんを一生懸命にやってきた。確かに経済には役立つが、「聞くこと」「聞いて考えること」、そして「考えたことを話す」ということがない。

外国にはディベートがあり、相手を負かす訓練をやっている。そういう人間とグローバルの中でぶつかると、主張したり、リーダーになって引っ張っていくということが日本人はできない。それは教育の中でやっていないから。そういうことも、論語を学ぶ中で子どもたちに身に付けさせたい。

めだか論語シンポジウムの第1回大会を開催したことで、小さくとも、確かな風を吹かせることができたと思う。それが、さらに広く、深く、大きな風となることを期待している。

（聞き手は中部本社デスク・吉浦郁夫）